

分科会	小4・5年	郡市名	岡崎
提案者	岡崎市立竜美丘小学校		高瀬透

研究主題

学ぶ喜びをわかち合い，共生のあり方を問う社会科の授業 確かな社会認識から行動化へ

1 はじめに

岡崎市の社会科部は研究テーマ『学ぶ喜びをわかち合い，共生のあり方を問う社会科の授業』を受け，2年間実践を重ね，本年度3年次を迎えた。この2年間の研究を通して得られた成果と残された課題は，次の通りである。

1年次... 6年「戦国時代から江戸時代へ」田中吉政と連尺の二十七曲がりを通して

2年次... 6年『決戦！秦梨城』と戦国時代」

<成果>・身近な地域の歴史教材を取り上げることによって，歴史学習への関心が高まり，学習課題を意欲的に追究することができた。

・視点を明確にした調査・見学をし，確かな足場を持った話し合いをすることで，新たな発見や感動を得ることができた。

・体験や一人調べをもとに人々の思いに迫る考えが出され，その思いに共感することができた。

<課題>・学び得た知識や社会認識が教室の中にとどまり，周囲に広げるまでにはいたらず，行動化に必ずしも深く結びついていなかった。

2 研究のねらい

3年次である今年度は，1・2年次の反省を生かし，確かな社会認識を持った上で行動化を切実に願うような子供が育つ授業を目指し，実践に取り組むこととした。そこで，1・2年次の研究で明らかとなった課題を克服するため，また，共生のあり方を実感的に追究できる教材として，4年生の「ごみ」の学習が最適であると考えた。その理由は以下のとおりである。

- ・ 子供にとって身近な教材であること
- ・ 人々の働きの様子が見やすいこと
- ・ 追究する上で見学や体験活動が容易であること
- ・ これからの生活で誰もが直面していく問題であること

この単元を通して，求める子供の姿は，確かな社会認識を持った上で，「なんとかしなくては」「なんとかしたい」という思いを持ち，「自分に何ができるか」を問う子供である。同時に，自分の生活に不利益になるかもしれないと感じつつも，よりよい生活のあり方を求めて，進んで行動しようとする姿である。

共生の意識は，体験や一人調べをもとに人々の思いに迫る考えが出されたり，その思いに共感できたりしたときに高まると考える。本研究においては，なくならない「ごみ問題」を，子供たちが自分の切実な問題として捉え，「ごみ問題」とかかわっている人々の思いにふれながら，今後どう対処するのかを考え，まわりに働きかけるなかで「ごみ問題」との共生が芽生えるのではないかと考えた。共生の意識が高まった子供たちは，自分たちの生活の場の中で社会の一員として何か行動しなくてはいけないという思いを持つはずである。本研究でねらう行動化とは，単に学習の後に行動を起こすというものではない。確かな学習で社会認識が深まるにつれて，子供の内面から湧き上がってくる思いを，子供自身の力で具現化しようとする動きであると考えられる。

3 研究仮説

本研究では、研究のねらいを達成するために、次の3つの仮説を立てた。

<仮説1>

体験的な活動を単元に組み込むことで、子供たちは、追究意欲を高め、問題を身近にとらえることができるであろう。

本研究では、仮説1を具体化するために、次のような手だてを単元計画の中に位置づけた。

導入での家庭のごみを教室に集めての分別体験とそれに続くごみ出し体験。さらに収集作業の様子を観察やごみステーションを管理している人や収集作業経験者への聞き取り。そして、処理施設であるクリーンセンターやリサイクルプラザの見学である。

これらの活動を通して、子供たちは、一人一人が確かな問題意識を持ち、また、本物に触れることで対象を身近なものに感じ、問題解決に向けて前向きに取り組んでいくことができるであろう。

<仮説2>

単元を貫く課題を設定することで、子供たちは、追究意欲を持続し、深い社会認識を持つことができるであろう。

粘り強い追究に耐えうる単元を通した課題を設定することができれば、その視点をもって、資料等で調べ学習をしたり、聞き取り調査をしたりすることができるであろう。子供たちが、それぞれ異なる調べを展開していても、意見を主張しあう場面では、単元を貫く共通の課題に帰着して考え、お互いに考えを深め合っていくことが可能になるのではないだろうか。

本研究では、導入時の分別体験から、ごみ分別の必要性を問い、その場面で出された意見から「分別・リサイクルでごみはなくなるだろうか」という課題が設定できると考えた。

<仮説3>

学習して身につけた社会認識と現実とのずれから生じる、新たな問題意識を持つことによって、子供たちは、考えをより深め、行動化へとつなげていくであろう。

単元を貫く課題のもと、段階を踏んで学習を進めれば、その子供なりの社会認識が身についてくる。その認識をより深め、行動化へと発展させるため、子供たちに、それまでの学習によって身につけた社会認識と現実の社会事象とのずれを意識することができるような資料を提示する。子供たちは、提示された資料を通して、これまで学習してきたことをもう一度見つめなおし、なぜそうなってしまったのかという新たな問題意識を持つであろう。この新たな問題意識が、子供たちの中に、自分が行動しないではいけない気持ちを高めるのではないかと考えた。

本研究で、新たな問題意識を持たせる資料として、単元計画の中に、次の二つの資料の提示を位置づけた。一つは、将来的に不可欠となる計画中の新しい最終処分場や新しい焼却施設についての資料。もう一つは、まだまだごみ分別がされていない社会の現状をつかませるためのコンビニのごみの提示である。

前時までの学習で、子供たちは、ごみ処理が組織的・計画的に行われ、その中でたいへんな思いで真剣に働く人がいるという認識を持つであろう。さらに、二つの資料と出会うことによって、子供たちは、新たな問題意識を持ち、「ごみ処理に携わっている人のために、ごみ問題をなんとかしたい」「自分たちにもできることはないだろうか」ということを考えるであろう。この新たな問題意識が、子供たちの考えが行動化に発展していく原動力となると考える。

4 単元計画

	学習課題	学習内容	時間	備考
分別・リサイクルでごみはなくなるのだろうか	なぜ分別をするのだろうか。	分別の難しさや面倒くささ 分別をする理由	2	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭ごみの分別 ・家庭で出たごみ ・教師が準備するごみ ・岡崎市の分別表
	分別するとごみは減るのだろうか。	分別されたごみや資源の出し方 収集日、収集場所 学習の見通し	1	<ul style="list-style-type: none"> ・岡崎市ごみ収集カレンダー (収集方法変更前のもの)
	ごみや資源の行方を追っていこう。	集められたごみや資源の量 作業員のごみ収集の様子 地域の人々が協力する様子	2	<ul style="list-style-type: none"> ・可燃ごみステーション見学 ・不燃ごみステーション見学 ・リサイクルステーション見学
		収集時の苦勞 収集に関わる人の思い・苦勞 ごみや資源のゆくえ	1	<ul style="list-style-type: none"> ・収集作業をする人 ・Iさん(本校職員:9年間収集作業に従事)
		施設の概要 見学の準備・計画	1	<ul style="list-style-type: none"> ・クリーンセンター等のパンフレット ・岡崎市ごみ対策課のホームページ
		可燃ごみを焼却する方法 効率を考えた施設 施設で働く人の苦勞や工夫 リサイクルされる経路・方法	2	<ul style="list-style-type: none"> ・クリーンセンター見学 ・リサイクルプラザ見学 <p>見学の視点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ごみや資源の始末の方法。 2. 働いている人の仕事や様子。
		見学のまとめ	1	
	岡崎市のごみの始末は、だいじょうぶだろうか。	それぞれの立場に立った意見 組織的、計画的に進められるごみや資源の始末・リサイクル 減ってきているごみ 回数の増える収集日 満杯に近づく最終処分場 なくならない「ごみ」	1	
	解決されない「ごみ」問題を、どうしていったらいいのだろうか。	家庭で進めているリサイクル 新たに稼働することが決まっている最終処分場 計画中の焼却施設	1	<ul style="list-style-type: none"> ・新処分場や新焼却施設が計画されていることがわかる資料
	このごみ、どうする!?	コンビニのごみに対する考え マナーが守られない社会の実状 自分にできることがあるという意識	1	<ul style="list-style-type: none"> ・コンビニのごみ箱 ・マナーが守られていないごみ ・乱雑に捨てられているごみの写真
	ごみ減量・リサイクルを進める「4年4組マイプラン」を考えよう。	可燃ごみを減らす工夫 リサイクル推進の方法 自分でできるごみ減量・リサイクル	2	
		マイプランの提案 マイプランの相互批評	2	

5 研究実践

(1) ごみと向き合い、身近に感じる子供たち

家庭ごみを分別しよう

単元の導入は、家庭で出た「ごみ」を教室に持ち込み、分別体験をすることから始めた。「生ごみがくさい」「これって、なにごみ？」など、つぶやきが出る中、自分の経験や商品にある表示を根拠に分別を行った。教師が示した岡崎市の分別表をもとに作業を進める姿も見られた。授業後の子供たちのノートには「ごみを分けているとき、すごくくさかった。片づいたら気持ちよかった。」「分別するときはいやだったけど、こんなにごみが集まるとは思わなかった。」といった記録が多く書かれた。



学級でもすごい量だね

分別すると、ごみは減るのかな

「分別はくさかったりたいへんだったりするのに、なぜ分別するのかな。」と問いかけると、「リサイクルのため」「ごみが減る」と返ってきた。そこで、「分別すると本当にごみは減るのかな。」と再度投げかけた。子供たちは「減る」と「減らない」との意見の対立に分かれて論じ合った。「減る」と予想した子供は、リサイクルの有効性を主張した。「減らない」と予想した子供は、教師が示した岡崎市の年間のごみの量の多さを主張した。ただ、深く調べていない時点での意見の出し合いだったため、みんなが納得できる結論には到らなかった。そこで、今後この問題をみんなで解決していこうということになった。こうして、「分別・リサイクルでごみはなくなるのだろうか」という単元を通す課題が生まれた。

(2) ごみの行方を追いかける子供たち

ステーション(可燃ごみ・不燃ごみ・リサイクル)の見学

課題を追究するにあたって、「どんなふうに分別されてるか、見てみないと分からない。」という子供たちの声を受け、最寄りのステーションに見学に行くことにした。そこでは、子供たちはまず、山のように積まれた「ごみ」の多さに驚いた。さらに、収集作業員が手際よく作業している様子をじっと観察していた。また、このステーションを管理している岡崎市シルバー人材センターのIさんに会い、話を聞くことができた。子供たちにとって最も印象的だったのは、「間違った分け方をしているごみは、出した人ではなくて、わたしたちが袋を開けて入れ替えている。」という話だった。H子の感想には「Iさんが、出してはいけないごみを取りのぞいてるそうです。たいへんなんだと思います。」とあり、ごみ処理に携わる地域の人々の存在に気づく子供が現われだした。

分別や収集の方法や、ごみのゆくえについて調べよう

ステーションに集まるごみを見ているうちに、「このごみはどこへ行くのかな。」という疑問が出た。この疑問を解決するために、副読本「おかざき」や岡崎市発行のパンフレットや資料で調べた。この調べ学習でごみがクリーンセンター・リサイクルプラザに持っていかれることがわかった。

さらに、より具体的な学習ができるように、教師がAさんを紹介した。Aさんは収集作業に従事した経験を持つ本校職員である。子供たちは、収集作業をする時の気持ちや自分たちの調べでははっきりしなかったことなどについて、質問した。自分自身の経験をもとにした話には重みがあり、特に、子供たちは「バラのとげでけがをした。」「生ごみの水気が切っていないから、プレスするときに水が出てきて、服について臭い。」「スプレー缶が原因で収集車が燃えてしまった。」など 経験者にしか分からない話に驚いていた。

話を聞いたあと、K子は、「もっと知りたいことをクリーンセンターで聞きたいと思いました。クリーンセンターの秘密とか工夫とか機械のこととかを聞きたいと思いました。」と見学への意欲を示した。また、H子は「わたしは自分がどれくらいごみを出しているのか、少し不安になりました。4 - 4でもかなりの量が出ているから、Aさんはすごくえらい人だなと思いました。わたしも、ごみを少しでも減らすように努力をしたいです。」と書き、ごみ問題は子供にとって、次第に身近な問題になっていった。

クリーンセンター・リサイクルプラザへ

子供たちは次の2つの視点を持って見学に出かけた。

1. ごみや資源が、どのように始末されているか。
2. 働いている人はどんな様子で仕事をしているか。

クリーンセンターでは概略の説明を受けた後、ガラス工房でガラス細工を行う様子、リサイクルプラザで

不燃ごみピットの様子や、捨てられていた自転車や家具を修理したり売ったりしている様子、そして可燃ごみが運ばれたり、ごみピットにためられたりしている様子、ごみクレーンを真剣な顔つきで操作している人の様子などを見学することができた。見学後のノートには以下のような感想が出された。

ごみの始末の方法については、施設の立派さや、計画的に効率よく処理している様子に感心している感想が目立った。働く人の様子については、真剣にたいへんな仕事をやっているという感想がほとんどであった。また、処理施設のはたらきと自分たちの生活を結びつけて考えることができた。



Aさんへの質問

- ・どんなことに苦労しましたか。
- ・どんな気持ちでやっていましたか。
- ・どんな仕事があるのですか。
- ・一日で一番多いごみは何ですか。
- ・自分の家で心がけていることは何ですか。

< ごみや資源の始末に関して >

- ・ごみを扱う建物なのに、すごくきれいだった。
- ・ごみクレーンが 1.5 トンもつかめるなんてすごい。
- ・ごみだってリサイクルすれば、服やガラス細工ができることが分かった。

< 働いている人に関して >

- ・自分の仕事に真剣に取り組んでいた。
- ・苦しい中、機械の汚れたところを洗っている人もいた。
- ・自転車や家具の修理をする人は汗をかいて真剣にやっているの、つかれるしたいへんだと思った。
- ・クレーンは自動だと思っていたけど、人が動かしていた。

< 生活との関連について >

- ・ただ、ごみをつぶして燃やしているわけではなく、ごみでも大切にしている。リサイクルプラザの人がものすごく苦労していることに感心しました。わたしたちもほんの少しでもごみを減らすことができれば、リサイクルプラザの人は助かるのかな、と思いました。
- ・ごみのことはバッチリ。

岡崎市のごみの始末はだいじょうぶだろうか

見学後、課題に対する意識をはっきりさせるため、「岡崎市のごみの始末はだいじょうぶだろうか」という論題で立場討論を設定した。「だいじょうぶ派」は主に施設や組織の確実さや分別収集をしているという事実を訴えた。「だいじょうぶではない派」は、新しい埋め立て地の問題について訴えた。

見学を終えた直後ということもあり、「だいじょうぶ派」が大多数であった。それは、ごみを出す段階か

ら、作業員に収集され、クリーンセンター・リサイクルプラザに運ばれ処理される段階までの流れがよく理解できていることの現われでもある。また、新しい埋め立て地ができるということに関しても、S子のように、「うめ立て地もそうかんたんにはなくならないし、ごみの分け方もいいと思う。」と楽観的にとらえている子供もいた。

(授業記録1)

Y男	こんなに広く埋め立て地を使うので、森が破壊されちゃう。場所をたくさん使うから埋め立て地が作れなくなっちゃって、岡崎市はだめになっちゃう。
S男	埋め立て地をどんどん作っていくと、岡崎市の地域の人たちに迷惑をかけてしまうから、埋め立て地はあんまり作らないほうがいいかもしれない。
K男	じゃあ、どこにやるの？ 灰とかは。
G男	埋め立て地を作ると地域の人に迷惑って言ってたけど、その地域の人だってごみを出すわけだから、それで自分たちのためにそうなるんだから、しょうがないと思う。
T	じゃあ、G男くんの家の隣に埋め立て地ができるとしたら？
G男	そりゃあ、嫌だけど、我慢はする。だってみんなが出すんだもん。うちだって出すし。

(3) ごみ問題に立ち向かう子供たち

解決されないごみ問題を、どうしていったらいいの?

これまでの学習で子供たちは、「ごみの始末に関して行政と地域の人々が、お互いにたいへんな思いや面倒な思いをしながらも、組織的・計画的に処理している。だから、ごみ問題に関して心配することはない。」という認識を持った。そこで本研究のねらいである行動化を図るため、ゆさぶりをかけることにした。

まず、岡崎の新処分場や新焼却施設建設の資料の提示である。新処分場の稼働については「来年度(平成16年度)から」と意外にも時期が迫っていること、「広さは学校の運動場の20倍くらい」と想像以上に広い面積を利用するということに驚いた。クリーンセンターの見学の前から、処分場にこだわって調べていたY男は、現在の最終処分場の写真をみんなに見せて、「岡崎市がだめになっちゃう」と発言した(授業記録1)。

また、N子は、「みんなで話し合って、うめたて地がいっぱいになるという話を聞いていると、ちょっとしまつが心配になってきた。」とつぶやいた。

課題「解決されないごみ問題をどうしていったらいいだろうか」に対して、S

男が「家でコンポストを使いたい」という意見を出した。すると、続けて「お菓子の箱を再利用している」「家庭で独自の分別箱を作っている」「スーパーでもらう袋を断るようになっている」「着れなくなった服を近所の子にあげてる」など、家庭でも実際に工夫しているのだということに改めて気づく意見が出た(授業記録2)。自分の家庭で何気なく見ていた様子もごみの減量につながっていて、行政と地域だけでなく家庭でも協力をしているという、ごみ処理の仕組みの全体像が意識でき、自分たちにもやれることがあるのでは、と考える子供が出始めた。

このごみ、どうする!?

そこで、さらにゆさぶりをかけることにした。それは、コンビニに集まるごみの現状を見せることである。そのねらいは、ごみ処理に関して様々な努力をしているにもかかわらず、マナーを守らない状況が自分たちの身の回りにあるというこ

(授業記録2)

T	この課題について、みんなの意見はどうですか。
S男	生ごみは、なるべくコンポストで土や肥料にする。
T	S男くん、うちでやってるの?
S男	今は、やってないけど、うちの母さんは欲しいって言ってる。
A子	似てるんだけど、使えそうなもの、例えばペットボトルをくずして、スコップを作ったりしている。
T男	ぼく、工作が好きだから、お菓子の箱を鉛筆立てとか小物入れに改造する。
T	なるほど。こうすることで、ごみの解決につながるかもしれないね。「使える物を使う」と言う意見の他にある?
N男	プラスチックはプラスチックで、紙は紙で、家で分別する箱を用意して分別している。

とに気づかせる，ということである。正確にはコンビニ等のごみは事業系のごみとして回収されるので，家庭ごみほど厳密な分別は必要ないが，捨てる人一人一人の意識の問題として敢えて提示することにした。

教室に持ち込まれた大きなコンビニのごみ箱，そして出てきた「可燃ごみ」を子供たちはじっくりと観察した。強烈な臭いもさることながら，缶やビン，ファーストフード店の容器，さらにはタバコの吸い殻や水筒など，これまでの学習で得たものとはかけ離れた現実が目の前に広がった。問題点を整理したところ，正しい分別ができていないことと，家庭のごみを持ち込んでいることの2点に焦点化された。「許せん！」「なんでコンビニのごみ箱にマクドナルドの入れものがあるの。」など，これまでの学習とは違って現実を直視した子供たちは，次のような感想を書いた。「ちゃんと分別してほしいと思った。」「捨てた人は直してほしい。」「学校ではみんなバッチシだと思ってたけど，外ではこういう現実があることがよく分かった。」など，捨てた人への批判や要求が多く書かれた。

4年4組マイプランを考えよう

自分たちの学習だけでは納得ができない状況に追い込まれた子供たちは「新しいうめ立て地を少しでも長持ちさせないと，ごみだらけになっちゃう。」「このままだとがんばって働いている人がかわいそう。」「ぼくたちでもやれることがあるはず。」という声を次々にあげた。子供たちの声は，「4年4組マイプランを考えよう」という新たな課題に発展し，自分たちに何ができるかについて考えるようになった。

自分たちだけでできるという考えとしては，ポスターや本，分別，見張りなどが出された。それらのプランに対して，積極的に反論や付け足しの意見が出された。

提案されたプラン	プランに対する意見
・ちゃんと分けてくださいというポスターを作る。	ポスターがあっても，守ってくれないかもしれない。 守ってもらえるような内容になるように考えればいい。
・こんなふうのリサイクルされますというポスターを作って，貼る。	ここに捨てると，リサイクルされますよ。と誤解されてしまうと思う。 ポスターだけじゃなくて，本も作って，歩いている人に配る。 これだったら，勉強してきたことがたくさん書けると思う。
・4年4組のみんなでコンビニのごみを分けに行く。	全国や愛知県でもかなりのお店があるから，できないと思う。 学校の授業があるから，毎日できない。 長い時間，続けられないから，短い時間だったらできそう。 竜美丘学区だけだったら，なんとかなりそう。
・コンビニやスーパーにコンポストをおいて，「生ごみを入れてください」と書く。（生ごみは肥料になって役に立つから）	もともと生ごみは家で捨てるものだから，わざわざ持ってきいたら，おかしい。 家庭ごみを持ってこれちゃう可能性があるから，置かない。 コンビニやスーパーで買ったものの食べ残しだったらいいと思う。だから，分別の種類を増やせばいい。 肥料になるんだもん，いいことじゃん。お金がかかる分は，岡崎市が何千円かお金を出してくれるはずだし。 わざわざお店にコンポストを置かなくても，家庭にコンポストを置いてもらうように宣伝したほうがいい。

全体での話し合いのあと，グループに分かれ，グループ単位で話し合いを行った。学区に貼るポスターについて話し合うグループでは，「ペットボトルが何にリサイクルされるかを説明する。」「生ごみは水気を切らないと，つぶしたときに飛び出してしまいますって書けばいいよ。」「ごみを減らすには，分別・リサイクルしかない！」「クリーンセンターの人ががんばっていることは，みんな知らないだろうから，どんな仕事を書けば，分別に気をつけるんじゃないの。」「使えるものは捨てないで，また使えば，ごみを減らすことができる。」「汚れたままだと，片づける人がたいへんだから，きれいにしてから出して下さいって言葉を入れる。」など，これまでの学習を生かした話し合いを行っていた。

それぞれのグループでまとめたことを，もう一度学級全体の場を出し合い，自分たちできそうなことを

整理した。最後に、Y男から「1学期は考えるところで終わっちゃったから、2学期にみんなでやりたい。」という意見が出され、2学期の総合的な学習の時間を使って活動していくことになった。

6 研究の成果と課題

本研究では、「確かな社会認識から行動化を図れる子供たちを育てる」ために、3つの仮説を立てて実践研究に臨んだ。以下、本実践を通じた子供たちの姿から仮説の妥当性について検証してみたい。

<仮説1> について

子供たちは、家庭などでごみが分別されていることには気づいていた。また、リサイクルについても、言葉として耳にしていた者は多くいた。しかし、それらの意味や必要性について関心を示している者は少なかった。したがって、単元の切り口の場面でごみ分別をした時には、子供たちのごみに対する意識は「くさい」「分別をするときは嫌だった」といった感覚的なものであった。

こうしたごみに対する意識が、ごみステーションやクリーンセンターなどの見学、ごみ処理に携わる様々な人々の話に接するなどの体験的な活動を通して、「もっと知りたいことをクリーンセンターで聞きたいと思いました」(K子)「自分がどれだけごみを出しているか不安になりました」(H子)へと変容していった。

このように変容した子供たちの姿を見ると、体験的な活動は、子供たちは追究意欲を高め、問題を身近にとらえていくために効果的な手段であったと考える。

<仮説2> について

「分別・リサイクルでごみはなくなるのだろうか」という本単元を貫く追究課題を設定した子供たちは、課題の解決のために、ごみステーションやクリーンセンターの見学、ごみの行方の調査、「4年4組マイプラン」づくりなど、様々な活動を生み出した。本単元の学習を通して、子供たちが主体的に学習する姿を見せたことは、本課題が粘り強い追究に耐えうる課題であったことの証であったと考える。

また、意欲的な追究であったからこそ、ごみ処理を取り巻く人々の努力や願いに共感を受け、「自分たちも何とかしたい」という思いが生まれてきたのではないかと考える。

<仮説3> について

クリーンセンター・リサイクルプラザの見学を終えた子供たちは、合理的に考えられた処理方法や一生懸命に働く人たちを見て、岡崎のごみの始末は安心だという意識を持った。しかし、新しい処分場が稼働する事実を知ったことで、自分が生きているうちに同じ問題にきっと直面するという危機感を持って話し合いを行ったり、処分場が建設された地域の人の思いに自分を重ねたりした。また、コンビニのごみ箱の分別が正しく行われていないという身の回りの現実を知ったことで、自分たちでなんとかしたいという思いを持った。自分の学びから得た社会認識と現実とのずれを意識したことが子供たちの心をゆさぶり、「マイプランを考えよう」という積極的な動きに発展したのではないだろうか。

本年度の研究実践により、私たちは上記の成果を得た。しかし、課題も残された。

マイプランの内容を分析してみると、「ごみ処理に関する問題を自分自身の問題ととらえながらも、解決するのは自分以外の人」と安易に考える子供たちが多くいたことに気づく。こうした現状を見ると、本実践では、社会的な認識から行動化に移る段階で生じる溝を十分に埋め切れていなかったのではないかとと思われる。

来年度は、本課題の克服に向け実践に取り組んでいきたい。